

米株の大幅調整が日本株の重しに

2009年9月2日(水)

第一生命経済研究所 経済調査部
副主任エコノミスト 人見 小奈恵

TEL 03-5221-4523

e-mail: hitomis@dlri.dai-ichi-life.co.jp

金融不安が米株相場の重しに

欧州株式市場では弱い経済指標が相場の重しとなりました。7月のユーロ圏失業率が9.5%と前月比+0.1%増加し、1999年6月以来、約10年ぶりの高水準となりました。ドイツは前月比横ばいでしたが、フランス、スペインなどは悪化基調が続いています。また8月の英製造業PMIは49.7と、前月(50.2)や市場予想

(51.5)をともに下回り、失望感が広がりました。一方、米国株式市場では、好調な経済指標にもかかわらず、米系金融機関に対する悲観的な見方が相場の重しとなり、NYダウは3日続落となりました。米投資ファンド傘下のヘッジファンドのデフォルト観測、米金融サービス大手の債券利払いの一部延期、アナリストによる米保険大手の投資判断引き下げのほか、一部の金融機関に対する経営不安観測など、金融に関する懸念が広がりました。しかし、これらの内容には事実の裏付けのないものも含まれており、投資家の先行き懸念が顕在化した形でした。株安、債券高(金利上昇)、円やドルの上昇に加えて、投資家の不安心理を表すシカゴ・オプション取引所のVIX指数は前日比+12.1%の急上昇となりました。

本日の米国株安を主導した金融株は3月の安値からの上昇を牽引したセクターでしたが、金融規制強化の動きや商業用不動産部門などの不良債権リスクなど懸念材料も多く、しばらくは調整局面が続く可能性があります。ただし、調整一巡後は実体経済の回復度合いを織り込みながら緩やかに水準を切り上げていくものと思われます。

米ISM製造業景気指数は52.9と、2008年1月以来、1年7ヶ月ぶりに景気の縮小と拡大の分かれ目である50を上回り、市場予想(50.5)も大きく上回りました。昨年12月から8ヶ月連続で上昇しており、米製造業の回復基調を示す好調な結果でしたが、強い数字はある程度事前に織り込まれており、相場を押し上げるには至りませんでした。

米株安につられて大幅安

欧米株式相場が大幅下落となったのを受けて、日本株市場も大幅安で始まりました。寄り直後は海外での円高基調を引継いで相場の重しとなっていました。92円50銭/ドル近辺まで円高が進んだ後は、中国株の上昇や好調な豪GDPなどをを受けて円安方向へ振れ始め、日経平均株価も10200円近辺で下げ止まりました。市場全体が落ち着きを取り戻す中、堅調さが目立ったのが豪ドルでした。豪4-6月期GDPは前四半期比+0.6%と、前四半期(同+0.4%)や市場予想(同+0.2%)をともに上回りました。豪景気は中国をはじめとする内外景気対策の支えもあり、世界の中では比較的早い回復が見込まれています。一方、日本株は前場に下げ止まった後はほとんど動かず、日経平均株価は▲250円安の大幅反落で引けました。東証一部上場銘柄の約9割が下落する全面安の展開でした。先物市場では、短期的に日本株の利食いを推奨するレポートを出した外資系証券が、売り手口でダントツのトップに躍り出るなど、一部で利益確定売りの動きが見られました。

日本株は米国株に追随しながら上昇してきた側面も大きいことから、米国株の調整はマイナス要因ですが、製造業中心に世界景気は回復基調が続いており、下落余地は限定的であるように思います。株価の調整は一時的なものと思われますが、日本市場においては新政権の動向にも注意が必要です。

以上